

日本語の料理名に現れる de と with:

CookPad データから見えるもの

小野 雄一

筑波大学 人文社会系

ono.yuichi.ga@u.tsukuba.ac.jp

1. はじめに

例えば、料理名である「チーズ in ハンバーグ」における in は日本語なのか英語なのか、という問題を検討すると、in は英語の in という形式、音声を借用しつつも、日本人の母語話者であれば誰でも共有していると思われる日本語の語形成規則を利用して、日本語として生産的に生成していることがわかる(例えば[1][2]など)。よって、これらの現象を見て、英語の in の用法を誤って理解している日本人が半端に利用した結果産出されたのではなく、借用を利用しながら、創造的な表現を日本語の文法規則に従って産出された表現であると考えられる。この例において、in は供給言語(つまり英語)の「～の中に」という意味を表す前置詞として使用されているのではなく、「～入りの」という日本語の動詞的名詞(Verbal Noun)として使用されている。よって、「チーズ in ハンバーグ」は「チーズ入りハンバーグ」といった具合に理解されている。

先行研究[3][4]において、in には大きく3つの使用の仕方があるとしている。これを本研究では

TYPE I, TYPE II, TYPE III と呼ぶことにする。TYPE I は「チーズ in ハンバーグ」のようなものである。この表現において、主要部はハンバーグであり、

チーズは修飾要素であると考えられる。この表現が、「ハンバーグ in チーズ」という語順で使用されることがある。これが我々が TYPE II と呼ぶものである。構造が鏡像関係でありながら、実際は、TYPE I と同じ食べ物を指していることがわかる。

そして、TYPE III は in が英語の前置詞のように振る舞うものを指している。例えば、「豚肉の唐揚げ in 上海」というレシピが Cookpad[5] には挙がっているが、この例の中での in は「～入りの」とは解釈できず、前置詞の in の意味と文法構造をそのまま取り込んでいるものと考えられる。以上の観察をまとめてみると、以下ようになる。以下の例では、in とその補部にあたる要素を固まり(構成要素)として [] で表記し、主要部を太字と下線で示している。

TYPE I

• [チーズ in] ハンバーグ

[Modifier in] **Head**

in = 日本語の Verbal Noun (VN), 「入りの」

TYPE II

• ハンバーグ [in チーズ]

Head [in Modifier]

in = 日本語の Verbal Noun (VN), 「入りの」

TYPE III

・豚肉の唐揚げ [in 上海]

In = 英語の前置詞

先行研究[2][6]において、主に TYPE I/II の日本語の動詞的名詞用法(VN 用法)と英語の前置詞用法(P 用法)は、心理言語学的実験に基づく調査研究の結果、容認生判断テスト(acceptability judgment test)において有意な差があることを示し、日本人母語話者は両者の構造の違いに関する文法知識を有している点を明らかにしている。

2. 問題設定

同じような英語の前置詞の日本語の料理名への取り込みが行われるものに with がある。「タラのムニエル with きのこクリーム (TYPE II)」や「レモン with ネギ塩やきそば(TYPE I)」の例の他に、「お刺身風サーモンの軽いスモーク with お箸 (TYPE III)」の用法が観察される。従って、in と同様の分析が可能であるのではとの予想を動機づける。事実、[5]の中では、同様の容認生判断テストを行った結果、同様に TYPE I/II と TYPE III との2つの構造の間に有意な差が観察されている。

しかし、Cookpad データベースを詳細に観察してみると、in と with では出現頻度に大きな違いがあることが観察される。TYPE I と TYPE II に関して、以下の表に示すように、with においては、TYPE I の用例が全体の5%程度にとどまっている。しかも、in と with の出現時期はほぼ同じと考えられる(図1)。つまり、どうしてこのような頻度の差が生じるのか、言語学的な説明が求められる。その上で、最適化や言語処理に関する分析を行わなければ、その結果が、我々の人間の直感的知識を反映しないものになってしまう可能性があるからである。

表1 in と with の出現頻度の違い

| | in | with |
|---------|------------|------------|
| TYPE I | 3499 (63%) | 56 (5%) |
| TYPE II | 2079 (37%) | 1133 (95%) |
| 計 | 5578 | 1189 |

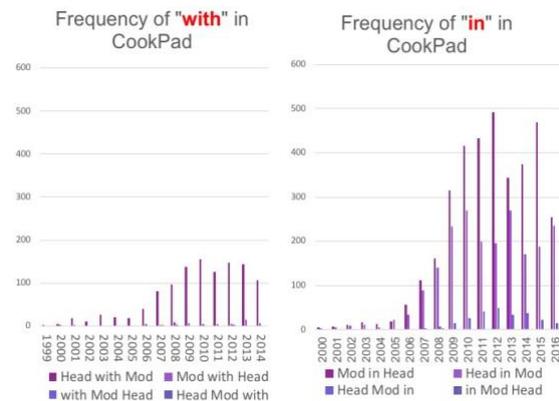


図1 with と in の出現の変遷

本稿では、この問題を解く手掛かりとして、with は in と違って、TYPE I の出現を拒んでしまうような強力な語彙が日本語に存在しているためではないかと仮定し、それが Cookpad の中でどのように使用されているのかを分析した。

3. 日本語の de

de は日本語の助詞である「で」に対応するものと考えられる。例えば、TYPE II の「唐揚げ with Coke」であれば、「Coke で(de)唐揚げ」と書き換えたりすることが可能である。また、TYPE I の「レモン with ネギ塩焼きそば」であれば、「レモンで(de)ネギ塩焼きそば」という表現も可能である。しかも、日本語の de は日本語の語彙そのものであるため、極めて自然に直感にしたがって使用ができる。この「で」のより西歐風な書記体である de を利用した料理名は

Cookpad の中で多数見つけられる。しかも、そのほとんどは TYPE I の用法である。

表2 de の用法

| | de |
|---------|-------------|
| TYPE I | 107 (0.5%) |
| TYPE II | 21649 (95%) |
| 計 | 21756 |

つまり、with で使用できないのはほとんど de で利用できる。逆に、de で使うことができないものは with で使用されている状況を確認できる。

次に、with と de で出現する主要部や修飾語句はどのようなものかを観察するために、共起ネットワーク分析を試みた。まず、図2に出現頻度による分類している。

| deにだけ出現 | deによく出る |
|---|---|
| 炊飯器 フライパン 圧力鍋 ビザ 食パン 塩麹 キャラ弁 餃子 シチュー 電子レンジ 土鍋 肉じゃが おかず カップ ホワイトソース ダイエット 手軽 オムレツ きんぴら ラスク 漬け ロール HB おやつ パウンドケーキ 残る ごぼう 巻く パエリア しっとり | レンジ おから パン グラタン ホットケーキミックス もち クッキー 弁当 ごはん 残り おにぎり ピラフ コロケ 天然酵母 蒸す さつまいも めんつゆ カルボナーラ イタリアン 冷凍 おつまみ 美味しい とる キッシュ 炊き込みご飯 オムライス トースター 唐揚げ 焼きそば 揚げる |

| 両方によく出る | withによく出る | withにだけ出現 |
|--|--|--|
| 簡単 サラダ 豆腐 パスタ ケーキ カレー 和風 煮る スープ 大根 豆乳 ヘルシー 炒める ご飯 ソーセージ トースト うどん かぼちゃ プリン 白菜 煮物 ジャム チャーハン ココア リゾット タレ マフィン さかな お好み焼き 巻き | チーズ ソース トマト 納豆 ヨーグルト 焼き 野菜 クリーム 味噌 バナナ 醤油 キムチ チキン パター チーズケーキ マヨ ドレッシング きのこと キャベツ にんにく ポテト ツナ たっぶり ハンバーグ 大葉 もやし 豚肉 アイス チョコ レモン | Sauce ホイップ クリームソース Rice Sweet Tomato Chee ココナツ パンナコッタ 玉子 Mayonnaise ブルーチーズ シリーズ チョコチップ Chocolate Cake Chinese ジェノ 兵衛 Boiled Potato Miso Cool Japanese 素揚げ Brown Sauted チキンカツ Shimeji Garlic |

図2 出現頻度による分類

次に、出現回数の多い単語を選び出し、それが2つの文書においてどれぐらいの比率で出現するかをグラフで表現したものが図3である。

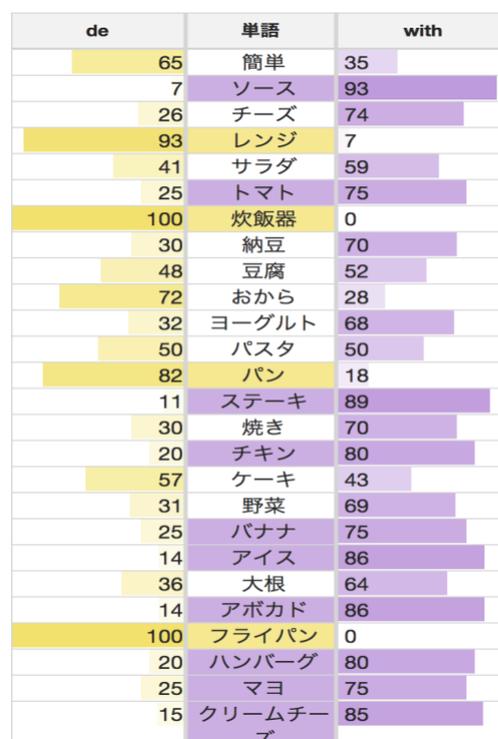


図3 単語の出現比率

図2からは主に de に出現するのは、炊飯器、フライパン、レンジなどの道具や、手軽などの状態を示す後など多様であることがわかる一方、with の方は主にソース、クリーム、ヨーグルトなどのような、添えるもの、素材が多いのがわかる。同様なことが図3でも示されている。

また、de の出現は with や in とほぼ同じであり、その使用頻度は with や in よりもはるかに多いことがわかる。

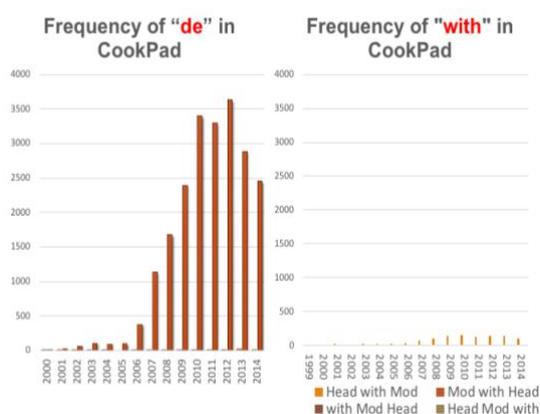


図4 de の出現の変遷

これらの観察から、with を借用したい場面、特に TYPE I で使用したい場面においては、多様で自然に利用できる日本語の助詞で(de)があるために、その使用が限定的になってしまうのではないかと推測が可能であるのではないかとと思われる。

本稿では、with の頻度を分析する前提として、de の振る舞いに注目した。その結果、de と with は言語現象の説明する理論と結びつけられる可能性につながるような非対称性が観察された。この観察は、頻度のみを扱う分析では扱うことができない、人間の言語知識に直結する可能性がある。今後は、de の振る舞いと with との関係について、理論的考察を踏まえた上での基礎研究を進めていきたい。

参考文献

- [1] Shimada, Masaharu and Nagano, Akiko: Borrowing of English Adpositions in Japanese, Abstract of LAGB Annual Meeting 2014, Linguistic Association of Great Britain (2014).
- [2] 小野雄一, 呼思楽, 森野綾香, 若松弘子, 砂川詩織: 日本語の料理名に出現する英語前置詞の借用について: Cookpad データと実証実験から見えるもの、言語処理学会第 21 回年次大会発表論文集、pp.1020-1023 (2017).

[3] Shimada, Masaharu and Nagano, Akiko: Borrowing of English Adpositions in Japanese, Abstract of LAGB Annual Meeting 2014, Linguistic Association of Great Britain (2014).

[4] Nagano, Akiko and Masaharu, Shimada: Affix borrowing and structural borrowing in Japanese word-formation: SKASE Journal of Theoretical Linguistics 15-2, pp.60-84 (2018).

[5] 国立情報学研究所

<http://www.nii.ac.jp/dsc/idr/cookpad/cookpad.html>

[6] Yuichi Ono: The verbal noun use of English borrowed prepositions in Japanese recipe names, ELSJ 11th International Spring Forum 2018, Hokkaido University, May 12 (2018).